

学習の流れの例

- ① 日頃から取り組める共助について考える。
- ② 災害発生時に共助を上手く活用するにはどうすれば良いか考える。
例) ふだんから地域の方とコミュニケーションをとっておく、積極的に地域防災訓練に参加するなど。
- ③ p.38-41 を読んだり記入したりすることで、災害時に役立つ知識を身につける。

指導のポイント

東日本大震災や熊本地震、西日本豪雨、北海道地震などの大規模な災害時、けがをしたり、孤立したりして消防に助けを求めても、「断られる」ケースが相次いでいる。

参照：NHK「大災害時代 あなたに助けが来ないかもしれない…」

震災の被災者の多くは、地域の助け合い(共助)の重要性を痛感したと語っている。倒壊家屋からの被災者の救出、バケツリレーによる初期消火など、隣近所の助け合いによる減災活動が、被害軽減に大きな力を発揮する。

参照：内閣府防災情報のページ「「公助の限界」と自助・共助による「ソフトパワー」の重要性」

●横浜市消防団

消防団とは、ふだんは本業を持ちながら、火災発生時における消火活動、地震や風水害といった大規模災害発生時における救助・救出活動、警戒巡視、避難誘導、災害防衛活動などを行う消防組織法第九条に定められた市町村の消防機関のひとつです。また、平常時には、訓練や、応急手当の普及指導、巡回警戒、広報活動など、地域における消防力・防災力の向上に重要な役割を担っています。該当地域に居住している方、勤務している方、在学している方が入団できます。

参照：横浜市ホームページ「横浜市消防団」

3章 共助-3

今からできる防災への取組

大地震発生時には、消防車・救急車がすぐに現場に駆けつけられるとは限りません。そんなときには隣近所の助け合いが大きな力となります。

あて 災害時に地域の担い手であることを自覚し、日頃から取り組む。

警察・消防
自衛隊によって
助け出された人
約8,000人

市によって
助け出された人
約27,000人

◆ 地域が助け合いの基盤

日頃から近所の人たちとあいさつをして交流を持ちましょう。救助隊の到着に間に合わないとき、共助の力が発揮されます。

阪神・淡路大震災では、家屋の倒壊によって建物の下敷きになってしまった人のうち9割以上が、自力または家族、隣人などから救出されています。また、2024年元日に起こった能登半島地震では、道路が土砂崩れで寸断されたり船着場が崩れて、救助隊の到着までの間、近所の人同士で救助しました。

中学生になると、体が大きくなるとともに、自分の判断で行動できるようになってきます。だからこそ災害時には、周囲の状況を見て、協力的に行動してほしいと思います。そのためには、日頃から防災対策について考えておくことが大切です。そうすれば実際に災害が起こったときでも、訓練と同じように、落ち着いて行動できます。これは、私たち消防団の心がけでもあります。中学生のみならずには人を助ける力があります。困ったときに、人から頼られる存在になれるよう、これからも頑張ってください。

横浜市消防団 団長 高橋さん

市内の防災教育

2021年(令和5年)11月実施

旭中学校 地域防災訓練

災害時の被害を最小限に抑えるには、地域で行っている防災訓練に参加することが大切です。自治会・町内会などでは、地域の防災組織の訓練や地域防災拠点の避難所開設・運営訓練など、自主的な活動が行われています。写真は、横浜市旭区にある旭中学校で行われた地域防災訓練の様子です。旭中学校の生徒と、学区を同じくする中央小学校の児童が参加し、地域のボランティアの方々と一緒にさまざまな訓練をしました。

取材協力：旭中学校

2023年(令和5年)9月から実施

蒔田中学校 防災プロジェクト

横浜市南区にある蒔田中学校では、中学生一人ひとりが地域防災の担い手となるように、防災関係部署と連携した防災教育プログラムを実践しています。9月から、2年生の総合的な学習の時間など(合計12時間)を活用し、防災関係部署との関わりのおかげで、防災に関する知識や技術を習得してきました。

取材協力：蒔田中学校

『ご近所さん』 防災マンガ共助編 ～共助の大切さ～

防災学習で話し合い、自ら考えよう!

藤の木中学校の活用事例

「防災」は探究的な学習に向いています

防災の目的は「被害を最小限に抑えること」です。一人ひとりが正しい知識を持ち、日頃から備えれば、災害が発生した際に適切な方法で身を守ることができます。防災を通して、「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」と繰り返す、積極的に話し合いながら学び、自分なりの答えを出しましょう。

課題設定シート

情報収集整理分析シート

南区的藤の木中学校では、総合的な学習の時間に、はまっ子防災ガイドのセットを使って授業が行われています。

地域の復興

釜石縮住居復興スタジアム

震災による津波で流された小中学校の跡地に、復興のシンボルとして建設されたスタジアムです。2019年ラグビーワールドカップの会場のひとつでした。このスタジアムの存在は、釜石の人々が震災の悲しみを乗り越えるための希望となりました。

震災から約10年後、p.25の写真と比べてみよう。

■ 学習や訓練のようす ()内は支援部署

① 火災予防(予防課)

② 初期消火(南消防署)

③ 予防救急(救急課)

④ 心臓蘇生法(救急課)

⑤ 地震への備え(地域防災課)

⑥ 地域防災拠点(地域防災課)

⑦ 風水害への備え(南区役所)

⑧ ハマッコトイレ(管路保全課)

38

39

学習後の生徒の姿

災害時に中学生が活躍できることを自覚し、自助、共助の大切さについて学んだことを生かし、今後起こり得る災害に備えて試行錯誤しながら共助の輪を広げようとしている。

指導のポイント

地域防災訓練には積極的に参加するよう呼びかける。横浜市危機管理室からも、中学生の積極的な参加が望まれている。地域の消防団の方や、消防の方から直近の防災情報を聞けるチャンスである。回覧板でお知らせが回ってくるので、家族や兄弟と参加するよう指導する。参加すると、炊き出しを食べたり、防災用品などをもらえる場合もある。

●地域の復興

2011年に発生した東日本大震災より復興(復活)する釜石を象徴したもの。本書でこれまでに学んだ災害が起こる前の備え、起こった後の対処に続いて、元に戻っていく希望も学んでほしい。被災地の現状を学び、どうしたら復興していけるのか、自分たちは何をしたらいいのかといったことを生徒自ら学び実践につなげていきたい。どのような復興を目指し、どのように復興計画を策定し、どのように復興を進めるのか事前の準備が重要である。